

聖書：ヨシュア記5章10～15節

説教題：ここは聖なる所

1 過越のいけにえとマナ

ヨシュアは、約束の地カナンに向かうためにイスラエルの民を率いてヨルダン川を渡ります。渡り終えた後、神の命令に従って割礼を施しました。今日の箇所では、過越のいけにえをささげています。こうして見ると、約束の地に入るためにはずいぶんと煩わしい手続きを踏まなければならない、そんな印象を持ちます。

その過越のいけにえですが、どんな意味があるのでしょうか。もともとは、イスラエルがエジプトを脱出する前の夜にさかのぼります。家ごとに羊をほふり、その血を取って玄関の柱とかもいに塗りなさいと言われました。その夜、主はエジプトの地にさばきをおこなうとしていました。玄関の柱に血を塗るのは、そのさばきがイスラエルの人々に及ばないように、その目印とするためにということでした。これが「過越の祭り」の始まりです。

でも、なぜこの時点で過越のいけにえをささげるのでしょうか。そしてもう一つわからないのが、どうして主の軍の将が13節で登場するのでしょうか。いかにも唐突な印象です。これらのことは単なる偶然なのか。それとも何か意味があるのか。考えさせられます。

過越のいけにえをささげて二日後、マナの降ることがやんだとあります。マナのことについて少し確認します。エジプトを脱出してから間もないとき、人々はこのままでは飢え死にしまうと不平を口にします。それで

主は、天から不思議な食べ物を週に六日間降らせるようにします。これがマナと呼ばれるものでした。そのマナは、単なるお腹を満たす食べ物という意味にはとどまりません。主はこのように語っています。「(マナを食べさせたのは)人はパンだけで生きるのではない、人は主の口から出るすべてのもので生きる、ということ、あなたにわからせるためであった。」(申命記8章3節)

そのマナがやみます。「人は主の口から出るすべてのもので生きる」、そのことがよくわかったので、やんだのでしょうか。そうではないでしょう。もし本当に理解したのなら、イスラエルの歩みはずいぶんと変わっていたはずです。しかし、このあとイスラエルは何度も罪を繰り返します。わかっていないのです。

それなのに、なぜマナはやむのでしょうか。カナンの地に十分な食べ物があったから。確かにそうです。では、「人は主の口から出るすべてのもので生きる。」そのことを教えようとしていた神の思いはどうなるのでしょうか。

2 主の軍の将

(1) ヨシュア

聖書はそのことには何も触れないまま、いきなり場面が変わります。13節。「さて、ヨシュアがエリコの近くにいたとき、彼が目を上げてみると、見よ、ひとりの人が抜き身の剣を手に持って、彼の前方に立っていた。ヨ

シュアはその人の所へ行行って、言った。「あなたは、私たちの見方ですか。それとも私たちの敵なのですか。」

ヨシュアは、いまエリコを占領するために戦いの準備をしています。そこを越えなければ約束の地には入られません。大きな戦いになります。犠牲者が出ることは避けられないでしょう。リーダーとしての責任が重くのしかかってきます。

ヨルダン川を渡る前、主はヨシュアを励ましてくれました。「強くあれ、雄々しくあれ。恐れてはならない。」そんなことばを聞いたのだから、ヨシュアはどんな困難なときでも勇気を持って前に進んでいった。そう思うでしょうか。皆さん、ご自分のことをふり返ってみてください。主の救いは確かであると信じ、日々神様から励ましをいただくかもしれません。でも、思いがけない試練に会うことになったら、平安でいられる自信がありますか。私はありません。やっぱり悩むでしょう。苦しむでしょう。七転八倒するでしょう。おそらくヨシュアもそうだったのだらうと思うのです。どんなに主の励ましがあっても、大きな不安の中で思い悩んでいたと思うのです。

そんなとき、「主の軍の将」と呼ばれる謎の人物が現れ、こう言います。「あなたの足のはきものを脱げ。あなたの立っている場所は聖なる所である。」

これと同じ場面、どこかで見覚えがないでしょうか。モーセです。彼が荒野で羊を飼っていたときのこと、遠くに柴の木が燃えているのを見て不思議に思い、近づこうとします。そのとき神はこう言われました。「ここに近づいてはいけません。あなたの足のくつを脱げ。あなたの立っている場所は、聖なる地であ

る。」(出エジ3章5節) モーセに現れてくださった神がヨシュアにも現れてくださっています。

(2) 「いや」

しかし、まだヨシュアは目の前に現れた人物がだれなのかわかりません。とまどいながらこう問いかけます。「あなたは、私たちの味方ですか。それとも私たちの敵ですか。」

これに対し、主の軍の将は、「いや」と答えます。「あなたの敵である」とは言っておりません。しかし、「あなたの味方である」とも言っておりません。味方でもなければ敵でもない。ただこのように言います。「わたしは主の軍の将として、今、来たのだ。」

神である方が、手に抜き身の剣を持ち、ヨシュアの前に立ちほだかります。抜き身の剣は、すぐに戦いの準備ができる状態を示します。いったいだれと戦おうとしているのでしょうか。

私たちはイエス・キリストの姿を通し、神とはどのような方かを教えられました。人の罪を赦すために人となって来られたイエス。貧しい姿になられ、十字架で苦しまれたイエス。それが神のお姿だと思っています。ところが、ヨシュアの前に立っておられる神はあまりにも厳しいお姿で、主イエスと同じ神であるとはとうてい思えません。

3 ここは聖なる所である

(1) 敵でもない、味方でもない

旧約と新約の神が違う神であるはずはありません。神は唯一であり、神のご性質は永遠に変わらないはずで、ではここはどのように考えたらよいのでしょうか。神がモーセに対して語っていたことばがヒントになりま

す。申命記9章5節です。

「あなたが彼らの地を所有することのできるのは、あなたがた正しいからではなく、またあなたの心がまっすぐだからでもない。それは、これらの国々が悪いために、あなたの神、主が、あなたの前から彼らを追い出そうとしておられるのだ。また、主があなたの先祖、アブラハム、イサク、ヤコブになされた誓いを果たすためである。」

主の軍の将が、抜き身の剣を持っておられるのは、カナンに地に住んでいる悪い者たちを追い払うため。なるほどこれなら、あなたの敵ではないということになり、理解できます。

しかしまた、「あなたは正しくない。あなたの心はまっすぐではない」とも言っています。そんな私たちなのですから、主が私たちの味方になれるはずはありません。主の軍の将が、み方ではないという意味で「いや」と答えた謎が少し解けます。

(2) 過越のいけにえとなる

でも皆さんは納得できないでしょう。主は、私たちの味方ではないのですか。私たちの友となってくださったのではないのですか。それなのに、ではなぜここで「いや」と答えるのでしょうか。せめて「あなたの味方だ」と答えて欲しい。そう思わなかったでしょうか。

主がモーセに語ったことばをよく読んでください。主はカナンに地に住んでいる悪い人々をさばこうとしています。しかし、そのままだはイスラエルの人々もさばかれてしまいます。主のさばきから逃れおせるものはひとりもいません。すべてが罪人なのです。いっぼう、主はアブラハムに誓っておりました。アブラハムの子孫を必ず約束の地に

導く。この約束は永遠に変わりません。この二つのことを同時に満足させなければならぬ。主はそのように語っています。

どのようにして満足させるのでそう。ヨシュアたちが、過越のいけにえをささげたのを思い出してください。これは単なる儀式ですか。いいえ。主ご自身が神の子羊となられて、十字架でほふられることを現しています。主は、さばきと救いという二つの相反することがらを、主ご自身が十字架でほふられ、みからだをささげるという方法をもって解決されました。

(3) 新しいマナとなる

ではマナのことなどどうなったのでしょうか。「人は主の口から出るすべてのもので生きる。」そのことを教えようとしていた神の思いのことです。

主は十字架におかかりになられる前の晩、弟子たちとともに食事をされました。いつもの食事ではありません。過越の食事です。そのとき主は言われました。「取って食べなさい。これはわたしのからだです。」おわかりでしょうか。主ご自身がご自分のからだをささげてくださり、新しいマナとされました。だからもうマナは降らないのです。

過越のいけにえとマナ。そのことと、主の軍の将がこれにつながっていきます。

ヨシュアは質問しました。「あなたは私たちの味方ですか。それとも私たちの敵ですか。」どちらでもありませんでした。味方ではないと言われてがっかりする必要はありません。神は、味方という関係をはるかに超えたすばらしいことをしてくださったのです。罪人のためにご自分の御子を十字架でさばくことをよしとされ、主はご自分のからだ

を与えられました。そこまでしてくださった神です。

主は言われます。「あなたの立っている場所は聖なる所である。」なぜ、聖なる所なのでしょう。神がおられるから。もちろんそうです。でも、もう一つ大切な意味があります。神が、罪人を救うためにいのちを捨てる覚悟をされている。だからそこが聖なる所になるのです。ヨシュアは「聖なる所」の意味を悟ります。主がいのちを捨ててまで戦ってください。主がいのちを捨ててまで戦ってくださることを知り、喜びと感謝を覚えながらはきものを脱いでいきます。

主がいのちをお捨てになった十字架。その聖なる所に私たちがいま招かれている幸いを覚えたいと願います。